



○ 労山基金運営委員会

第2回オンライン説明会

開催について

9月27日の基金運営委員会で本年2回目のオンライン説明会を実施することを決めた。本説明会は去る7月20日に一回目のオンライン説明会を行なったが、質疑応答の時間が取れなかったため、今回は質疑応答を中心に開催する。

日時は、11月30日（水）19：00～20：30

参加対象は、基金担当者・運営委員だが、労山会員であればどなたでも参加できる。

開催方法は、Zoomで情報共有のバーベレスで行なう。

質問は11月18日までに労山ホームページの参加申込みフォームから、または労山基金宛に提出する。当日は、基金の登録や申請実務などの基金担当者が知らなければならぬポイントを中心に説明し、のちに質疑応答を行なう。具体的には、基金の登録、増し口、加入者の移籍の場合の手続きなどを説明する。また、事故って入院・通院した時の交付の具体的金額（5

口加入者）を提示する。

（今野善伸／労山基金運営委員）

○ ハイキング委員会

語り継ごう労山の価値を！

第23回全国ハイキング交流集会

は主管団体の奮闘もあり大成功した。登山というスポーツは対面での語り合い、実践で試し、それを繰り返すことで広がり発展する。その意味でもこの集会の成功は大きな跳躍台となる。1980年代「登山の社会的文化的価値・多様な登山」という創立理念の具体化、実践化を展開し、多くのハイキングクラブが誕生、大幅な会員増へとつながった。「若者が一生ハイキングを続けるはずがない。ハイカー層は登山者の源泉」などという暴論は瞬く間に雲海に消えた。今では30年、40年も会・クラブで多くの仲間が活動している。さて、今後の課題は後輩にこの労山の流れを引き継ぎ、仲間を増やしていくことだ。ハイキング愛好者はハイキングクラブのみならず、総合登山岳会にも多く存在している。我々が主人公のつもりでこの課題

に取り組もう。登山の経験を語るのも大切だが、同時に「登山の大衆化」という大きな役割を果たしてきた労山の登山界での価値を語り継ごう。

（田上千俊／ハイキング委員長）

○ 自然保護委員会

クリーン（清掃）ハイクから

グリーン（環境保護）ハイクへ

当たり前のようであるべく『自然』は、守らなければならない時代を私達は生きている。全国一斉で取り組んできた「クリーンハイク」。コロナ禍での山行は、ままならぬもので足元から見直す機会となったのではないだろうか。

私の所属している連盟では、「クリーン（清掃）ハイク」がアップグレードして『グリーン（環境保護）ハイク』に。具体的には、各会場でのゴミ収集、産廃調査に加え ◎自然環境を知る活動（親子観察会、ナラ枯れ処理放置シート回収、水質調査など） ◎山域を守る活動（道標・案内板の掃除、登山道・山小屋等点検など） ⑤ ◎『自然を傷つけない登山



スタートの八王子城址登山口での受付風景



スタッフと参加者で記念撮影

技術・登山様式』の啓発活動（各会場でのトイレ問題アピールなど）に、今年度は、メガソーラー視察ハイク、環境省等主催の大会ケ原のハルザキヤマガラシ除去、トウヒ林再生事業への参加を試みた。手ごたえは充分だったが、会員の自然保護熱は低いのが現状。まあ、現実を受け止めてポチポチと行くしかない。ところで、あなたのおふるさとの山は、元気だろうか。そろそろ来期にむけて歩きはじめてはどうだろう。そして会の特色を活かしてふるさとの山の自然を楽しみながら、私たち登山者だからこそこできる！ 多面的な活動を展開していこう。地方での一歩が、全国一斉で歩めば、力となり道が開く。山歩きと自然保護も表裏一体。それが登山の歩き方だから。

（高橋田／自然保護委員会）

○遭難対策部

転倒による手首の骨折事故増加

9月8日から10月5日までに届いた事故一報は33件34名。

転倒が15名（無雪期12名、沢登

り2名、訓練1名）。墜落が2名（登攀1名、人工壁1名）。転落が1名（登攀1名）。滑落が2名（沢登り1名、登攀1名）。体勢が4名（無雪期4名）。虫が5名（蜂4名、アブ1名）。その他5名（病気2名、他3名）。

登山形態では、無雪期22名、登攀4名、沢登り6名、人工壁1名、訓練1名。骨折14名、損傷4名、打撲1名、捻挫2名、脱臼2名、断裂2名。刺傷5名その他4名。男性15名、女性19名。下山中の事故は、13名。

所属連盟は、岡山が5名。兵庫4名。東京・愛知が各3名。道東・埼玉・長野・静岡・大阪・和歌山が各2名。道央・群馬・神奈川・石川・奈良・広島・香川が各1名。年齢は、20代1名、30代1名、40代2名、50代7名、60代14名、70代8名、80代1名。

今回は、転倒による手首骨折が多発している。濡れた木道や石等で滑り、転倒や尻もち、手をついての事例が多い。蜂やアブによる被害も多発した。

75歳の男性が沢を下降中に滞で

溺れ、心肺蘇生で助かる事例が発生している。高齢での体力不足や溺れない対策も必要と考えている。北海道では、極度の脱水状態で行動不能となる事例が報告された。熱中症の原因のひとつである脱水症は、水分補給のし方や予防の取り組みを会や個人で学習して頂きたい。

（石川昌／全国遭難対策部長）

※事故一報の一覧表は次ページを参照してください。